

北方四島の自然について

近藤 憲久

こんどう・のりひさ
昭和27年興部町生まれ
北海道大学農学部大学院卒
根室市教育委員会学芸員

本文のねらい・要点

北方四島は何故自然が残っているか？それは、特に豊かな河川生態系（釣り、網、禁止）と海まで「網禁止」の自然保護区だからだ。海は瑤瑤瑠水道を通るロシア側主張ラインを境に歴然としている。

1、はじめに

千島列島の南端に位置する、択捉、国後、色丹の三島と歯舞諸島を併せて北方四島と言う。戦後日本人に代わってロシア人が住み、その自然についてはベールに包まれたままであったが、ゴルフバチョフ時代に始まったベレストロイカやグラスノスチによりその状況が明らかになりはじめた。

戦前の森林施業は、帯広管林支局（一九五七）に述べられている。それによると、国後島に仮施業案が編成されたのが明治三七、八年頃で、千島に対する本格的な本施業編成規定が施行されるようになったのは大正九年からである。これによって行われた千島の森林経営は伐採林業であり、昭和一二年度からの三ヶ年の収支状況は、支出が収入の一角にも充たず、育成面への還元はなされなかった。根室支庁では、昭和一三年から一四年にかけて「南千島開発計画案」を作成し、それに応じて北海道庁では紗那に「千島調査所」を設け調査を行った。その結果、南千島の林業に対する写真も描かれたが、戦争の勃発と戦況の悪化のためにほとんど実行されることがなかった。この様な訳で、森林環境の破壊については、ことに終戦間際はひどく、森林施業を離れた極度の伐採が行われた。

筆者は、一九九二年から九八年まで、ビザ無しで三回、北方四島を訪れている。五〇数年経った今どうなっているのかを駆け足に見、その概要について述べたい。

2、四島の現況

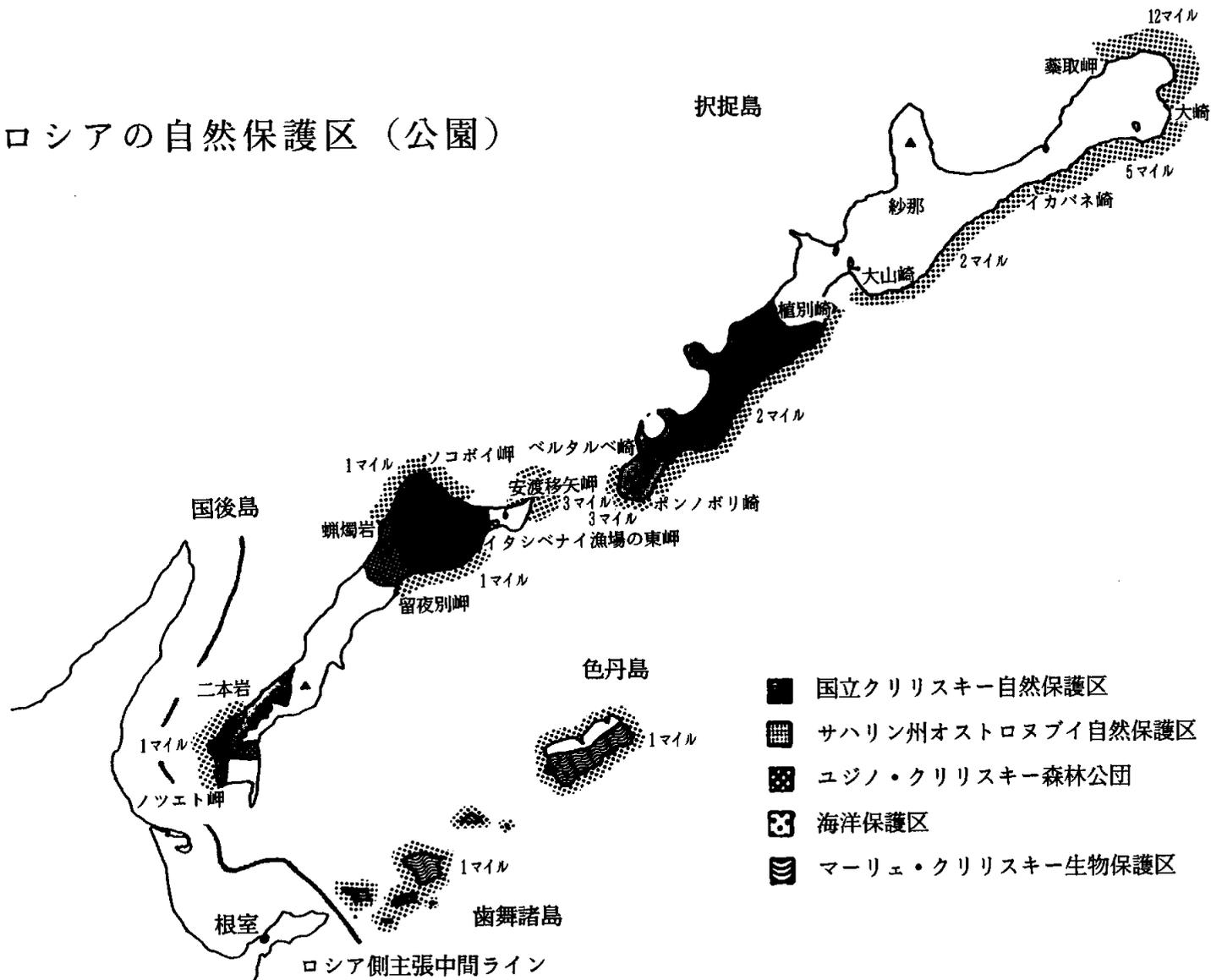
北海道は明治に始まった開拓以来原生の環境を失い続け、その進行が戦後早かったのは周知のところである。特に、河畔林を含む河川生態系、並びに低地針広混交林における生態系において著しい変化がみられ、動植物相は従来の姿を失っている。さらに、沿岸に生息、及び繁殖する海獣海鳥類においても著しい変化がみられた。しかし、北方四島は、北海道と比べて環境破壊が進んでおらず、動物群集が本来の姿で生息しているほど回復していた。特に、河川は河畔林のしっかりした砂防ダムや護岸のない自然河川であり、非常に高い価値を持っていた。

a. 国後島

国後島は、九二年に廻り、古釜布ーニキシヨロ間と古釜布ーセオイ川間を陸上からみる事ができた。また、古釜布湿原を周辺から見ることができた。

古釜布と古釜布湖との間には古釜布湿原が広がり、戦前国後松の産地として知られたところであった。湿原はほぼ完全に残っていて、衛星写真で見ると幾層ものアカエゾマツの林があるのがわかる。湿原への影響が懸念されるものとしては、湿原内を通りニキシヨロ湖へ抜ける道路が形成され、また、古釜布湖に流入する河川の上流部の針広混交林が軍事施設や別荘の建設のために伐採され、現在も進行中であることである。また、市街地周辺

ロシアの自然保護区（公園）





セオイ川の支流

の高層湿原は家畜の放牧が行われ、乾燥化がみられた点が挙げられる。

古釜布から東側は、近布内、カカナイ、植古丹に牧場施設が有る以外集落はなく、数軒の昆布番屋と自然保護区の管理施設があるのみである。国後島は、一八六五年頃に島南西部を焼き尽くす大火にあってはるか、明治から昭和にかけて何度となく山火事において泊山から東側北西斜面では無立木地が目立つが、留夜別川から東の自然保護区内やその西側の摺鉢山々麓の島の東側一帯を中心に良好な針広混交林が形成されている。特に、河畔林はよく残っていて、セオイ川では直径1mをこえるオオバヤナギの大木の群落が見られる。ここは、自然保護区であり、釣り(網)は禁止の所である。七月二日に行った時には、産卵を

終えたキュウリウオが多数死んでいた。その上を、二五〜三〇cmはあるヤマベとアメマスの群れが泳いでいた。自然保護区の職員によれば、このあとカラフトマスとサケが上ると言う。当然シマフクロウも多く、営巣木を確認したセオイ川を含め、クラオイ川からノチカ川までの間(二km×一五km)に、七つがもいた(ディハーン・キスレイコ、一九八八)。現在世界で最も密度の高い生息地である。それは、大径木の残った河畔林と豊富な魚類相を有した天然河川がこれを支えているものと考えられる。また、国後島留夜別から先の自然保護区内ではいたるところでヒグマの痕跡が見られ、知床半島のルシャ川やテッパンベツ川以上に生息状況していると見られた。

b. 色丹島

色丹島は、九二年と九八年に行った。エイトンノット岬、トイロ、イネモシリ、穴澗の二三三ピーク周辺、及びホロベツ地区を陸上から、また、ホロベツ―大岬間と松ヶ浜湾を海上から見る機会を得た。

穴澗の二三三ピークは、又古丹山の西隣に位置し、植生的にも連続したものがみられ、館脇(一九三一)の推賞した地区から外れるが、北側の海に面した斜面は高山植物の群落に覆われていた。ここは、穴澗から一、五kmの位置にありハイキングコースにもなっているが、エゾツツジ、チシマルリソウ、ウルップソウなどの高山植物がコース脇一面にあり、また、ミヤマビヤクシンの純叢もかなり見られた。館脇が記した高山植物群落は北西から北東斜面にかけた海に面した斜面に多かった。

また、出崎からエイトンノット岬にかけて、二



穴澗岬より穴澗市街、手前は高山植物



ホロベツ チシマウスユキソウ

脆弱に渡り「お花畑」が続いており、その主な植物を挙げると、チシマウスキノコウ、ウサギギク、エゾツツジなどである。ここから松ヶ浜にかけての太平洋側では、エトピリカ、チシマウガラスの希少野生動物が多かった。特に、トイロではエトピリカの巣が数百あり、昼間は沖合いに行くため数は少ないが、それでも飛んでいた数は一〇〇羽を越えていた。

色丹島は、三分二が自然保護区であるが、住宅地、並びに交通路として使用しているところ以外はほとんどの植物群落が残されている。特に太平洋側は海鳥の宝庫といえ、クリリスキー自然保護区では、沖合い一マイルまでが自然保護区で漁網は一切禁止だと言う。

c. 齒舞諸島

齒舞諸島は、九二年にカナクソ岩と海馬島、志発島に行った。

カナクソ岩では、トド、ウミガラス、チシマウガラス、海馬島では、エトピリカ、志発島アザラシを見た。それぞれ、一五〇〜三〇〇羽(頭)いた。ここも沖合い一マイルまでが自然保護区である。

d. 択捉島

択捉島は、九二年、九七年、九八年の三回行った。ここでは、紗那―天寧間、年明、別様川の支流アンコロ川畔化場、散布山々麓と瀬石沼上流部の森林を見ることができたほか、野斗呂岬から阿登佐岳間を海上から見ることができた。

紗那から別飛間は散布山々麓を通過する一本の道路で結ばれているが、途中ハイマツ群落を伴う良好なシコタンマツ群落を見ることができた。シコタンマツは、北方四島では、択捉島と色丹島だ



カナクソ岩のトド



散布山とシコタンマツ

けにしかなく、気象条件等により生育を阻まれて矮生化したことから、胸高直径が一mに近いものまで様々であった。九七年に西へ行ったときには、ラウス川に沿って広大なシコタンマツとハイマツの群落があった。

択捉島の北西岸は厳しい気象条件の影響を受けて海岸段丘上のかなり後退したところから森林が始まり、野斗呂岬では、先端部に自然草原が広がるほか、トドマツを主体とした針広混交林も風衝化している。この先、老門までは明らかに気象の影響と思われる無立木地が目立つが、温根登山から西単冠山にかけての山麓は谷沿いに良好な針広混交林が広がっている。また、宇多須都の浜を中心に西単冠山々麓にかけて広葉樹林、阿登佐岳山麓にかけて針広混交林が樹海となって広がっている。この間、集落はなく、防衛施設も一ヶ所しか見受けられなく、戦後手つかずで残っていたことを伺わせる。この低地帯にある内保湖の湖畔には自然保護区の管理施設があり、保護区の主要な部分をなすものと考えられる。

野斗呂岬はトド、アザラシ、ラッコの繁殖地として知られているが、百数十頭のゼニガタアザラシとラッコが一頭確認されただけであるが、東側の珊瑚崎、トド島の調査を行われなかったためと考えられる。択捉自然保護委員会のカシブルク氏の情報によるとラッコは北東海岸を中心に一千頭(九二年当時)生息していて、幌筵島、得撫島について千島第三の生息地である。

択捉島の北海道と違うところは、陸の哺乳類ではヒグマである。昼間は目撃する事はないが、「こんな所に」と思うところで前の日歩いた足跡を見た。仲間の人は、別の所でも足跡を見ている。

